

優秀賞

高校生部門

鹿児島県立武岡台高等学校2年

古野 由佳

祖父からの手紙

高校二年生の夏、私のもとに現金書留の封筒が届きました。送り主は、与論島に住んでいる祖父でした。

祖父は私が小さい頃、よく私を抱いて買い物に連れて行ってくれたりとても可愛がってくれていたそうです。しかし、私が物心つく前に祖父は体調などを考えて故郷の与論島に帰ってしまったので、私の記憶には幼い頃の祖父との思い出がありません。

そんなこともあって、六年前くらいから父と母が島まで連れて行ってくれるようになり、すぐに私と祖父との関係は元通りになりました。何年も会ってなかった孫の私を、祖父は戸惑いもせずに受け入れてくれました。

それからまた数年経って今、私宛てに届いた祖父からの封筒。私のことを忘れずにいてくれたのだと思うと、とても嬉しかったです。早速開けて中を見て、私は驚きました。それは金額でもありませんでしたが、それよりも一緒に添えられていた手紙でした。これまで祖父から直筆の手紙をもらったことなどなかったのです。きっと私の兄達も母もないと思います。手紙には、途切れ途切れ読めない字もありましたが、濃くしつかりと

「由佳、風邪ひくな、元気だね。またアオね」と書かれていました。

祖父は、学校に行けなかったので独学で字を学んだんだよ、と母が教えてくれました。生きていく中で、字が書けるということは大きな財産だと思います。必死に学んで苦労してやっと書けるようになった祖父の不器用な字からは、どんなに綺麗な字でも出すことのできない深い味わいと生きる強さを感じました。これまでにもらったどの手紙よりもストレートに胸が打たれて、自然と涙が出てきました。

初めてもらった祖父からの手紙。手紙というには小さな短冊くらいの大きさだったけれど、字から言葉から伝わる祖父の強さ、優しさは計り知れないものです。